

---

# 喜怒哀楽に姿なし

衣傘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喜怒哀楽に姿なし

### 【Nコード】

N6909A

### 【作者名】

衣傘

### 【あらすじ】

校内で嬉しいことがあると、別の場所ではフラれている人がいる。そんな喜怒哀楽が入り混じる環境（高校）で綴られる話。「外」と書いてあるものは、主人公以外の生徒を主役とした話になっております。

## 晴れた日に傘を差した人

暑くはない、ケドさ。

真夏の季節でも無いっていうのに、これだけ陽射しギラギラって法律的に許されるんでしょうか。

馬鹿みたいに朝寒いからってブレザー着込んで来たら、日中いきなり気温上がって来やがったんで裏切られた気分です。

「いやー、急に暑いですネ」

「働き盛りですよ。太陽のヤツも」

「有給出してやったらどうですか？」

「俵約家なんて無理ですネ」

「そーですか」

「道に落ちてる金は拾いますんで」

「ケチですか」

「いいえ、俵約家ですヨ」

「そうですか」

コイツらの話を聞いてると、体温どころか脳味噌の70パーセントぐらいが沸騰して蒸発しそうなテンションなので、涼しい窓際から仕方なく教室に待避してやった。

ベランダに信長よろしく陣取って、涼しい風をまったり堪能しながら、あんな意味不明な会話されたらこっちまでオカシくなりそうですよ。

「あ」

ただ一言。いや、一文字。

何が起こった？ と確認する為に声のした方向を振り向く暇もな

かった。

ドオン。と、背後から野球ボールが飛んで来て顔面スレスレの壁に当たって、何とも危機感に満ちた音を奏でた。

「つて、危ねーよ！」

「悪い悪い。コントロールミスった」

野球ボールが足元に転がる。

あと数センチズレてたら、恐らくボールの形に後頭部がへこんでたに違いない。

「しかし、あの双子は大変だな」

「見てるのが大変だ」

「調子狂うだろ」

「狂う」

「どっちが臯月だ？」

「さあ……左じゃないか？」

「左は卯月だろ？」

疑問系の嵐。嵐が吹き荒ぶ。

自信無い。っていうか未だにどっちが卯月でどっちが臯月が分からない。

「僕が卯月ですヨ」

「俺が臯月ですヨ」

つて、聞こえてたのかよ。と突っ込むには多少距離が開きすぎているし、何より疲れるし暑くなるから速攻で却下した。

「僕、が卯月で……」

「俺、が臯月か」

悠に続いてオレが言う。

というより、双子らしく片方だけ髪が七三分けとか瞳の色が違うとか、声がソプラノとか背が低いとかにして欲しいと思う。

「所で、何で制服着て来たんだ？」

「あーえっと、寒いから？」

「何で疑問系？　って言うかさ、急に暑くなるならなるって言うて欲しいよな」

「無理だろそりゃあ」

やっぱ無理だよなー。と笑いながら悠は落ちてた殺人未遂球体もとい野球ボールを拾って自分の席に戻って行った。

まだ使うのか。あの野球ボール。

「すいません。飛鳥君」

「前通りますよ。飛鳥君」

丁寧な挨拶を交わして　　というか一方通行的に挨拶をされて  
卯月と臯月が壁に寄りかかっている俺の前を通過した。

滅茶苦茶似てる。軽く犯罪でも出来そうな位に似た端正な顔立ち  
は、まさに神が作り上げた傑作とでも言ってみようか。

「卯月と臯月、暑くないのか？」

「はい。もう」

「ええ。治まりました」

「ちよっくらベランダ借りるぞ？」

「どうぞ」

「はい。どうぞ」

悠が笑いながら卯月と皐月の双子ら二人とベランダの使用契約を結んでいる。

うーむ、こうやって見ると悠も何気にカッコ良かったりするんだよな。いつも元気があつたりするし。

「飛鳥。行こうぜ」

「え？ あ、ああ」

ベランダは公共の物だから仲良く使いましょうなんて校則は無視する。

校則を貫き通すなら、この田舎にある高校でなおかつ資金不足の影響をモロに受けている貧乏な教室にエアコンの一つでも付けてくれと言いたい。

「言っても良いか？」

「うん？」

「直射日光のせいで、中より外の方が蒸し風呂みたいになってるよな？」

「……確かに」

「卯月皐月は何してたんだ」

「……日光浴？」

まさに一杯食わされた。

## 言葉の力は藍より青く／外

ウチの学校には、池がある。

何か訳の分からないコイがいたり、デザインかどうか区別が付かない位に濃緑色の水が満ち満ちていたりする。

水というのは、万物の根元は海から始まったと伝えられているみたいに、結構身近な場所にあったりするものだ。

血液の成分は、その殆んどが水から構成されていると随分前に聞いた気がする。

それ位しか知らなくても、水は僕達に取って大切な存在になっているらしい。

「何見てるんだ？」

中庭に差した日陰の中で、彼女はぼんやりと座っていた。

その、長い間手入れされていない濃緑色の池を見つめながら、顔も動かさずに彼女は答える。

池が綺麗、と。

その時は、分からなかった。

彼女の考えが素晴らしかったのか、僕の考えが浅はかで愚かだったのか。

考える時間が、長く続いていた。

その日の放課後に、雨が降った。

時間に比例して強さを増したそれは、容赦無く大地を叩き付けていた。

「濡れるぞ」

彼女の頭にそつと傘を重ねる。

雨は、時間をかけて、美しかった彼女の髪を濡らしていたんだろ  
うか。

音に紛れたのは、彼女の言葉だった。

「……ないで」

「え？」

「優しく、しないで」

確かに聞こえた。

小さな声、けれど哀しい声で。

「でも、雨が」

「良いの。すぐ乾くから」

「ずぶ濡れじゃんか」

それっきり、彼女は言葉を殺した。

雨は、止まらずに地面を浸食し続ける。

もう何時間も、飽きる事無く乾いた大地に降り注いでいる冷たい  
滴達。

僕は、一人でそれを浴びた。

その時、初めて雨が冷たいと感じた。

「何を、してるの」

傘に隠れて、表情は見えない。



確かに哀しかった声色が、その一瞬だけ驚きを含んでいるものに変わっていた。

「涙も、乾くのか？」

「え？」

「乾くまで、使ってくれよな」

言葉は、意思の伝達に過ぎない。  
本当に大切なのは、それを心から伝えられるかどうかだと考えている。

彼女に対しては、それが出来た。

「……………」

僅かの間だけ沈黙が続いた。  
彼女は立ち上がると、何故か持っていた傘を頭の上まで運んで来てくれた。

「袖衣。私の名前」

「え？ あっ、ああ」

「要君」

綺麗な瞳が、視線の先に映る。

「えっと……………」

そう言っ、彼女は表情を崩した。  
思い詰めていた表情から、一気に柔らかな笑顔へと変化したのが分かった。

「その……」

思わず視線を下に反らす。  
言葉が紡げない。不思議な感情。

「帰ろ。一緒に」

雨は、まだ上がらないだろう。  
同時に一步を踏み出す。

砂利の擦れ合う音が聞こえた。

太陽の足音は、もうそこまで近付いているだろう。  
ふと見上げた雲の中に、一筋の明るい裂目が見えたから。

敷かれたレールは壊して進め

占いが流行る時がある。

どこかのサイトで見つけた占いで、やたら納得行かない結果が出たとしても気にしていないフリをしながら傷付いている。

「貴方はアリストテレスです」

「誰それ？」

「有名な哲学者みたいです」

「よそ者お断りだから」

よそ物が俺の席を使ってるな。

朝から人の椅子を断る事もそっちの気で奪うのは構わないのだが、奪っている人とその付き人に問題があったみたいだ。

「裕奈。取り合えず返せ」

「えー！ ちょっと待ってよ！ 占いやってて手が離せないから！」

手が離せないのはお前じゃないだろ。

裕奈の方は手ぶらでアクションを取りながら話していたのが見えたぞ。

「蓮希、何とか出来ないか？」

「ごめんなさい。無理そうです」

「やっぱりか…… 敵は裕奈だもんな」

試しに小言を言ってみる。

「何かほざきましたか？」

「いいえ。何も」

やはり裕奈には聞こえたらしい。  
結局自分の席を取り戻せなかった俺は、仕方無く空いていた適当な椅子を借りて座ると二人の会話を観察する事にした。

「本当にこれで良いんですか？」

「良いよ。続けて」

何か新たな占いを言っらしい。

どうやら、裕奈が蓮希に喋ってもらって占いを試しているみたいだな。

「貴方が大切にしている物は？」

「権力」

それが大切な物かよ。いや、そもそも権力って物じゃないな。

「座右の銘を答えて下さい」

「さおだけ屋は潰れないものだ」

理由が気になるな。ってそれじゃ座右の銘どころか主張になっているぞ。

「貴方の長所は？」

「自分の拳で釘が打てる所」

明らかに釘の方が固いだろうな。

「では、短所は？」

「結局釘の方が固くて負ける所」

やっぱりそうか。

「……はい。結果が出ました」

「どうなったの？ 鍋の具材占い」

そんな占いだったのかよ！

「貴方は、鍋の底にある豆腐です」

「……………え？」

どうやら納得していない様子。

「鍋底豆腐のあなたは、いつも縁の下から皆を味付けするタイプ。無くてはならない存在と言えるでしょう。多分」

「多分って何よ!!」

「そう書いてありますもん」

そりゃ納得行かないよな。俺だって言われたらへこむだろうし。

「……豆腐。ん、豆腐？」

何だ。何かに気付いたらしいぞ。

「豆腐っておからだよね？」

「そうだと思います」

「健康食品じゃないの!!」

そっちかよ！

「えらくプラス思考だな」

「まーね！ 飛鳥と違うから」

「俺はマイナス思考じゃないぞ」

「うるさいわよ！ 電池のマイナス極みたいな顔してるくせに！」

どんな顔だ。

「飛鳥もやれば良いのよ！ きつと悪い結果が出るに決まってるんだからね！」

「ああ良いよ。やるさ」

どうやら占われるハメになった。

質問を出されて順番に答えて行く。もちろん（権力）だとか（さおだけ屋は）なんておかしな答えは言っていない。

「はい。結果が出ました」

「ごめんな。何回も読ませて」

「いえ。楽しいので大丈夫です」

蓮希が読むのはこれで二度目。裕奈の強制朗読を合わせたら更に行くだろう。

「貴方は、珍しいから使わずに取って置いたまま忘れられたギザ10。です」

なるほどギザ10か。つてえ？

「……何占いだそれ？」

「思い出の品物占いです」

何だソイツは。

「ギザ１０なあなたは、つかの間の幸せをみんなに与えます。しかしそれは本当につかの間なのであまり意味が無いでしょう」  
「大きなお世話だよ！」

何で真面目に答えたのにそんな結果が出るんだよ。

「ぷ、あはは……お似合いね」

「やかましい！」

「ふふ……確かに面白いです」

「蓮希まで笑うなよ！」

声を殺して笑う裕奈と蓮希。

笑わせるつもりは無かっただけに、軽く傷付いたりするのだが笑いの神が降臨したただだと自分を励ましておく事にした。

「さて、仕上げね」

「仕上げ？」

「アンタもやりなさい蓮希！」

裕奈は蓮希に飛びかかった！

蓮希に１４のダメージ。ってあまりに急だからＲＰＧ風になったじゃねえか。

「わわ、私もやるんですか！？」

「当たり前。１０円君もやったんだから蓮希もやらないと悪いですよー！」

多分俺の事だ。10円君は。  
ちなみに、蓮希は文房具占いの結果だった。  
ボールペンのキャップ



## 恐怖の入口は此方から

何処までも追い掛ける。

そんな芸当、ストーカーか余程暇な人にしか出来ないと思っていたが例外もあることを痛感させられた。

「待てこの野郎!!」

「ワイは野郎じゃなくて翔や!」

「翔!? 待ちなさい翔!!」

「あかん! 名前教えてしもた!」

ずっと逃げなあかんハメになった。

こいつ、何や理科室にいた(幽霊)と自分では言っとなるんだけど、あからさまに人間そのものでいまいち信用出来へん。

「ちょー待て! 先生に叱られるで?」

「問答無用! 誰にも私の姿を見る事なんて出来ないのよ!」

やっぱそうか。予想してたわ。

「あんたの体を使って、私は生きる!」

「勘弁してや!」

「嫌と言ったら?」

「……逃げるわ! 何してでも!」

だからワイは走っています。

やなくて、捕まると危なそうやから放課後の学校を疾走しとる。

ちなみに、ここは四階やから一階に行ければ校舎の外に出れるか

もしれへん。

目指すはそこや。

#### 四階の階段

「な、何やこれ！」

10 段階段に敷かれた無数の画鋏。

アイツ（幽霊）の仕業か。とパニックになりそうになるが上靴を履いてれば貫通して突き刺さる事はないんやで幽霊はん。

ジャリ。と画鋏同士が互いに擦れ合いながら奇妙な音を立てる。転んだら針串刺しの刑も良いとこやな。

#### 三階の階段

「待ってたわよ翔!!」

「うあアンタいつの間になんや！」

「覚悟なさい！　ってえ？」

ドンッ。と車の飛び出し事故よろしく止まれずに思い切り幽霊と衝突する。

「ったいわね、止まりなさいよ!!」

「すまん！　やけど逃げるで！」

「逃がさないわ！　首狩り激情！　今からここは血の海になります事よ!!」

めっちゃ怖いわ！　何か背後から叫び声が聞こえて来るし助っ人はおらんし！

「こら！ 廊下を走るな」

「あー先生！ えろうすんまへん！」

冷静や。やっぱ見えてへんな。

「喰らいなさい！ 真・零式疑似死体経験的衝撃波！」

背後からの声。と同時に風が来た。

バリン！ と正面にあった図書室ガラスが割れた。あかん本気で死んでまう！

「避けるんじゃないわよ！」

「アンタが勝手に外したんや！」

「私を侮辱するとは……こうなったら何が何でもあんたを斬り刻むわ！！」

体を奪うんやなかったんかい。

二階フロア

「とにかく階段に、ってうわ！」

熱っ！ って何で二階のフロアが燃えてんねん！ 避難訓練は終わってたで！

「どう？ 幻覚攻撃の味は？」

「やっぱしアンタの仕業かい！」

幽霊が窓の外に浮いてる。もう慣れたから驚かへんけどな。

「幻覚によつて焼け死ぬが良いわ！」

「嫌や！ 間抜け過ぎる！」

それだけは避けなあかん！

ふと外を見ると、幽霊が多少苦しそうにしてワイの方を見てる事に気付いた。

「……MP使うんか？」

「そうよ！ だから早く燃えなさい！」

素直やコイツ。なら話は簡単や。

「暑いから裸になるわ」

「そうしなさい。つてえ！？」

気が散った瞬間に炎が消えた。アホやな動揺しただけで失敗するとは。

「隙あり！！」

「あ！ まま待ちなさいよ！」

待て言われて待つヤツはおらん。

1階フロア

「このまま行けば出口やな」

後ろにも誰も見えへんし。このまま行ったら外に出られる。

そうになったら陸上部の足で逃げ仰せられる確率は高くなるやろと思つ。

「待ちなさい!!」

幽霊の声が遠くから聞こえた。

「しつこいなアンタも!」

「再始動! 真・零式疑似……」

やばい! また呪文唱えとる。

インコースを曲がって行った時、見知らぬ二人のシルエットが見えた。

「え? うわあっ!!」

互いに衝突。ソイツは転ぶ。

「誰か知らんがすんまへん!」

一旦止まって誰かに謝る。もたもたしてたら捕まりそうやから勘弁してや後でジューズの一本でも奢るさかいと心の中で言っとく。

「兄さん。平気ですか?」

「頭のネジが飛びましたネ」

「どんなネジですか?」

「とても大切なネジですよ」

「そうですか」

何やけつたいな会話やな。

「ちよっあんた達どきなさい!!」

「え？ うわあっ！」

またぶつかったでコイツ。

「気を付けて下さ……ん？」

「さ…… 皋月っ！！ それに卯月！ 何で二人がここにいのよ！？」

「貴方もです。何故廊下に？」

皋月と卯月は双子やるか。えらい似てるし区別が付かへんな。

「さては、封印を抜け出しましたね？」

「ちち違っわよ！！ 翔が勝手にお札を剥がしたから悪いのは翔なの！！」

「言い訳無用です」

そう言い、卯月と皋月は青色のペンダントをポケットから取り出して幽霊をはさみ打ちの要領で素早く取りかこむ。

「ちょ、また封印！？」

いきなり慌て始める幽霊。やけど逃げようにも卯月と皋月が身構えとる。

それからは一瞬やった。卯月と皋月が何かの呪文を唱えると次の瞬間には幽霊の姿が消えてもったから。

「ふう…… 怪我は無いですか？」

「あ、別に平気やで」

「良かったですね無事で」

ペンダントをポケットにしまう双子。

「所で、あの幽霊を知っとるんか？」

「もちろんですよ。あの方は昔からこの高校に住み着いてる地縛霊です」

「貴方が封印を解いてしまったので、僕らが理科室に封印しておきました」

ホンマの幽霊やつたんか。

「悪戯好きでして、俺達もほんと困っているんですよ。性格も騒がしいし」

「もう理科室には入らないで下さい。今度は告白されるかもしれませんよ。純情なのでそっち系には免疫がありませんし」

だから気が散ったんやな。

「じゃ、僕達はこれで」

「じゃ、俺達はこれで」

同時に言われても聞き取れへん。

「おおきに！ 助かったわ」

「あ」

「忘れてました」

双子が同時に立ち止まる。

「幽霊の名前は凜です」

「名前で呼ぶと良いですよ」

良い情報なんやろか。取り合えず礼を言っと双子は今度こそ向こうに行った。

あの二人、何してたんや？

ともかく今後、理科室に近寄るヤツがいたら陰ながら笑っというる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6909a/>

---

喜怒哀楽に姿なし

2011年1月16日04時42分発行